

2005

ひびき

排除から共生へ

主を愛し、御声を聞き、主に従いなさい。

...loving the Lord, your God, obeying his voice, and cleaving to him

『ひびき 2005』

排除から共生へ

主を愛し、御声を聞き、主に従いなさい

目 次

はじめに “愛のあかし” を深めよう	2
1 難民支援の壁 「わたしが牢にいたときに…」 大阪教区シナピス難民移住移動者委員会	4
2 支援ネットワーク 「中学3年の娘が妊娠したんです」 カリタス家庭支援センター	8
3 ノーマライゼーション 「私は不自由な身体に生まれてよかった」 電動車イスで行商する渡辺浩一さん	12
4 DVシェルター 「人って、こんなに温かかったんですね…」 DV被害から立ち直りつつある母と息子	16
5 エイズ患者・HIV感染者のラウンジ 患者・感染者への理解と連帯を 差別と偏見を取り去るために	20
6 統合失調症 荒れ野の旅に光が見えた 統合失調症28年の歩み	24
7 発達障がい児の療育支援 自閉症の子どもたちに寄り添って 問題をひとりで抱え込まないで …	28
8 野宿の人 今夜の出会いにおいて 言葉や、素振りや、仲間の心を傷つけないように	32
あとがき	36
付録：2005年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	

“愛のあかし”を深めよう

『排除から共生へ』～主を愛し、御声を聞き、主に従いなさい

カリタスジャパン

責任担当司教 宮原良治

神の似姿としてつくられた人間は、社会的で共同体的な側面を持っています。そのため私たちは互いに助け合い、支え合い、協力し合いながら生きています。また人とのかかわりを通して、人格が形成され成熟していきます。このような相互補完の営みと同時に、競争心や対抗意識、不信感、ねたみ、劣等感など、さまざまな欲望と利己心が頭をもたげ、それらが人と人との分裂や対立をつくり出すこともまれではありません。また過酷な競争社会の中で、生産性、効率性、利便性だけが追求され、それにそぐわないものは容赦なく切り捨てられ、排除されるという価値観が優先されているのも事実です。

旧約聖書には、兄弟の仲たがいの話がいくつか紹介されています。

アベルとカインは、神への捧げ物に端を発して、兄弟殺しに至りました。ヤコブとエザウは、神からの祝福をいただくために、母親まで巻き込みながら、醜い争奪戦を繰り広げ、兄弟の絆に深い溝をつくってしまいました。ヤコブの子どもであるヨゼフは、自分の兄弟たちからエジプトに売り飛ばされてしまいました。

神への捧げ物や神からの祝福という崇高で貴いことにかかわりながら、その結末は、悲惨で醜い兄弟の分裂や対立でした。

カリタスジャパンでは、四旬節を有意義に過ごすための副読本として、「排除から共生へ」をテーマにした『ひびき』を、今年も皆さま

にお届けすることになりました。

この小冊子は、さまざまな人間模様の展開されている社会の現実を目を留めながら、その中で、叫びをあげている人たちに耳を傾けたいという願いと、その叫びにしっかりと向き合いながら、共に歩んでいる人たちの姿に学びたいという願いから編集されたものです。

この小冊子が、何らかの形で、希望の光、励まし、支え、愛の奉仕への勇気などを提供するきっかけになることができるならば幸いです。さらに、小教区共同体や各事業所で、この小冊子を参考にしながら、“愛のあかし”を深める一助にでもしていただけるならありがたいです。なぜなら、この小冊子には、「排除から共生へ」という社会の人たちの大きな期待にこたえるために、私たちの教会が“愛のあかしの家”になりたいとの希望も込められているからです。その“愛のあかし”が心のこもらない形だけの活動にならないためにも、この『ひびき』に登場する人たちに思いを寄せたいと思っています。

過越しの神秘を実りあるものとするために、四旬節の間、私たちのうちにやどっておられる三位一体の神秘に「心のまなざし」をしっかりと向けたいと思います。その神秘の光を、社会から排除されている兄弟姉妹の顔に見出し、またそうした人たちがうちに秘めている生きようとする真摯な決意や、人間の善さを神の賜物として受けとめ、共に生きることができるよう努めたいと思います。

このような歩みの先に、自己の利益に固執する誘惑を克服した“愛のあかしの家”が実現してくるような気がします。

主キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆様の上に豊かにありますことをお祈り致します。

「わたしが牢にいたときに…」

大阪教区シナピス難民移住移動者委員会

難民一。私たちは彼らを排除しようとするのか、共生しようとするのか、この課題は、日本という国の人権感覚、国際感覚を正面から問うている。大阪教区シナピス（社会活動センター）難民移住移動者委員会で働くビスカルド篤子さんは、人権保護担当としてこの問題に取り組み12年余りになる。

行き場を奪われる人たち

「これまで難民として支援してきたのは、アフガニスタン、ベトナム、トルコやイランにいたクルド人、そしてミャンマーといわれるビルマの人たちなどです。ただ、ベトナムとそれ以外の国の人たちとでは、少し事情が異なります。ベトナム難民の多くは、'89年から'91年にかけてインドシナ定住難民として日本に来た人たちで、すでに難民として認定され、一応日本での生活基盤をつくり上げています」

とはいえ、生活するなかで大きな問題があちこちで生じている。

「昨年（2004年）11月、マスコミでも報道されましたが、ベトナム人女性ギアさんが強制送還され、そのとき入管（入国管理センター）職員によって手錠をかけられ、毛布です巻き状態にして飛行機に乗せられ、機内でも一時猿ぐつわまでされるという事件がありました。まったく人格を無視したひどいやり方です」と篤子さんは憤慨する。

実は、この事件は、その背景までは十分に報道されていない。彼女は以前、万引き事件で逮捕され、1年半の実刑判決を受けた。当時妊娠中で、服役中に刑務所出産。生まれた子どもは夫が引き取った。夫にとって仕事と育児の両立は苦しく、何とか周りのベトナム人仲間に支えられ、妻の帰りを待っていた。

ギアさんはまじめに服役し、1年未満で仮釈放となった。だが、ようやく釈放されたギアさんを待っていたのは夫や子どもではなく、入管だった。

「彼女はその場で国外退去を命じられ、そのまま今度は入管に収容されてしまったのです。面会室で、『面倒を見る人がいないときは赤ちゃんが家で独りぼっち』と泣き崩れてしまいました」

入管法（出入国管理及び難民認定法）では、「退去強制を受ける者を送還することができないことが明らかになったときは、（中略）その者を放免することができる」となっている。ギアさんの場合、夫と子どもがベトナム政府により「棄民」扱いになっている。そのため家族で送還されても受け入れ拒否となり、結局、日本でしか生活できない。

「飛行機に乗せられるとき彼女が叫んだのは、『アンちゃん（娘）に会わせて！』ということなんです。どうして今の時期になって、急にこんな形で送還しなければならないのでしょうか。『退去強制の執行停止』を求めた私たちへの当てつけとしか思えません。彼女が放免されなければ、家族はいつまでも引き裂かれたままなんです」

このように、比較的量刑の軽い犯罪によっても難民としての在留資格まで剥奪されるケースが、何件も起こっている。科せられた量刑を終えたにもかかわらず、元の生活には戻されないで収容され、その結果ある人は家族と引き離され、ある人は精神障害を発症してしまう。

「難民認定の権限を持つ法務大臣には大きな裁量権が認められているのだから、『国際人権規約』や『子どもの権利条約』にのっとって、家族が日本で生活するのを認めるよう働きかけていくしかないですね。人間らしい生活ができるよう、法務省が動かないのなら、厚生労働省などにも働きかけていかなければならないでしょうね」

追い返される人たち

ベトナム人以外は、難民認定を受けるための支援が最大の課題となる。以前支援したアフガニスタン難民のHさんは、日本滞在中に難民

申請をした。しかし、入管法で定めている「事由が発生してから60日以内」という期限を過ぎていたということもあって、日本政府は認定しなかった。

「彼はハザラ人で、タリバン政権が支配していた当時、パシュトゥーン人と深い対立関係にある民族なんです。息子を殺され、自分自身にも殺害指令書が出されており、国連からは難民としての認定を受けていたんです。それでも政府は認めようとしませんね」

彼は認定を求めて裁判で争ったが、その間も入管での収容は続いた。長期にわたる収容で、持病を悪化させながらも高等裁判所までいった。しかし判決の前に、パキスタンで難民生活を送る妻の病状が重くなったという連絡を受け、帰国せざるをえなくなった。Hさんは、「4年間闘って何もなかった。病気の妻と子どもたちを日本へ呼び寄せたかった」と涙を流し、ついに、いまだ治安の安定しないアフガニスタンへ戻るしかなくなった。

最近、難民申請で係争中の裁判について、次々と判決が出るようになってきている。しかし、ほとんどが申請者の敗訴である。勝訴してもさらに控訴され、ビザがおりず先が見えない。篤子さんの言葉によると、「出口がなくて、しんどい」という状況である。

「1年間の難民受け入れ人数は、日本の26人に対して、アメリカは約28,000人、ドイツは約23,000人（2001年UNHCR統計）。まったく桁が違います。日本は官民とも、諸外国での対立・迫害の厳しい実情を、あまりにも知らなすぎます」

「経済的に発展していない国から来る人間は皆お金が目当て、多くは犯罪人というひどい偏見を耳にします。それは政治家とて同じで、行政に要求するのは不法滞在の摘発ばかり。自国では生きていけない難民を受け入れなければという発想へはととてもいきません」

支援のための課題

難民支援の内容は非常に多岐にわたる。日常生活を送るための面倒

を見ることから、入管との交渉、裁判での支援など、高度に専門的な知識を要するものまで幅広い。入管での非人道的な拘禁が続く、となれば放免を要求することになる。しかし仮放免が認められれば認められたで、その日からすぐに生活する場所を確保しなければならない。

「仮放免のためには身元引受けの保証人や保証金も必要です。しばらくは何から何まで生活の面倒を見なければなりません。ある程度落ち着いてくれば自立を促す必要もあり、そうなる和生活費を得る手だてを考えなければならないし、家を借りるときの連帯保証人もいます。いろいろな面で幅広い支援なしにはやっていけません」

また大変なのは、収容中に心身ともに病んでしまった人だ。過酷な迫害のなかをくぐり抜けてきた難民にとっては、入管での高圧的な扱いで恐怖の体験がフラッシュバックするのだ。

「こちらから見れば、入管は収容中まともな治療も受けさせず、病気がひどくなってくると仮放免を認め、援助団体のお金で治療を受けさせている、としか言えません」

そのようななかで、何かと支援してくれる教会があることは心強い。しかし同時に、十分な理解が得られているとは言いがたいのも事実だ。篤子さんは、「ふだん、ぜひ協力したい、とおっしゃっていたシスターに連帯保証人をお願いしたところ、体よく断られてしまいました。教会のいう協力は、まだまだきれいな事にとどまっています」と嘆く。

こうしたかわりのなかで出てくるのは、信仰が現実の行動と結びついていない、という日本の教会の弱さである。一人ひとりが抱える具体的な問題に対し、なかなか現実的な対応ができず、つつい内面的な心の問題ということで片づけられてしまっている。

「そういう点では、むしろ日本ほど経済的な発展をしていない国からやってきた外国人信徒のほうが、ずっと大人ですね。彼らとの関わりは、日本の教会に大きな刺激と成長の機会を与えてくれます」という感想に、私たちが学ばねばならないことの大きさが感じられた。

「中学3年の娘が妊娠したんです」

カリタス家庭支援センター

戦争やテロで奪われる人の命。年々増え続ける自殺、児童虐待、そして若い世代による凶悪事件…。将来に希望を見出せない現代社会で、小教区の教会に所属する私たちに何ができるのだろうか。そうした現実を目をそむけず、問題を抱え、苦しむ人たちとともに生きる取り組みを始めたのが札幌教区のカリタス家庭支援センターである。センターを立ち上げ、その中心的な役割を果たしているのが堤邑江さんだ。

他では相談できないことも

30年間、カトリック系の病院でソーシャルワーカーとして働いていた堤さんにとって、人生の転機となったのは、2004年6月、この病院を運営していた修道会が撤退したことだった。

「本当に悲しい思いをしました。でもそれを嘆くよりも今できることを。私はソーシャルワーカーです。あちこちに相談機関はできています。でもそれは残念なことに子育て支援とか教育相談、お年寄りの相談など、福祉分野ごとに限定されていて、包括的に支援する態勢にない。家庭の問題を総合的に、しかも弱い人たちを排除するのではなく、共に生きるという精神に基づいて支援する相談機関が必要だと思いました」

そんな胸のうちの、カトリック教会の本部事務所社会福祉担当の場崎洋神父に訴えた。昨年10月のことである。場崎神父は語る。

「堤さんの訴えを聞き、川でおぼれている人を見て、準備するから1年待ってくれとは言えない。家庭の問題に対して十分に行き届いた対応が教会はできていないのが現実です。信徒のなかの人材を取り入れ、その人たちが福音宣教をしていく。キリスト教の精神に基づいた専門チームで問題を抱えた家庭を支援していく必要性を痛感していま

したから、すぐに対応しようと思いました」

2004年5月。とりあえずカトリック教会本部事務所の敷地内にあるベネディクトハウス1階に、カリタス家庭支援センターをオープンした。

スタッフ7人は、札幌地区の教会の研修会で堤さんの呼びかけに応えた人、堤さんの病院時代のコーディネーターをしていた人たちで、月曜から金曜まで堤さん以外に2人が交代で詰めている。

「相談者数は8月末現在で102人、相談件数は311件になります。このなかには私の病院勤務時代からかかわっているケースもありますが、相談者は教会外の人たちが信徒の3倍なんです。これはマスコミで取り上げられたためですが、浮気・不倫、親子の葛藤、30代の引きこもり、家族の世代間の価値観の相違など、他の相談機関につながりにくい、そして相談しづらさを抱えている人が多いですね」

家庭支援センターは、原則として実名を出さないと相談は受けないことにしている。「匿名で話を聞いてほしい」という人には、いのちの電話など他の相談機関を紹介する。

「というのも私たちは相談する人も、相談を受ける側もお互いに責任を共有するからです。自分が何者なのか、今何に困っているかが明確になると、かなり限定された話になり、1、2回の電話や面談で方向性が見えてきます。例えばホームレスの人であれば、まず生活の居を定めて、生活保護をもらいながら、求職活動をするというところを見きわめてケースが終了します。問題を解決するためにどの社会資源を活用すればよいかなど、具体的な生活支援をすることが目的で、相談者との間に共依存関係をつくらないように気をつけています」

試練ではありません、解決しましょう

センターにいと、信徒や社会に対する各教会の取り組み、かかわりが見えてくる。信徒の生活にまで気を配っている神父は、自分一人で抱え込まず、問題を抱えた人にセンターを活用するよう勧める。

「これまでは教会に相談に行くと、多くの場合、『これは試練だから

耐えましょう』とか『祈りましょう』という対処の仕方でも済ませてきました。私は『これは試練ではない、あなたがその気になったら解決できる問題ですよ』と言います。信者だからグチっちゃいけない、教会の中では家庭のドロドロした問題を口にしてはいけないと思いつけ、やっと言えたのが70過ぎという信者の方にも会いました」

こうしたアドバイスができるのは、社会福祉士、精神保険福祉士の資格を持ち、第一線の現場での体験を積み重ねてきたからだろう。

「教会に助けを求めて来る人は、神様がいるかという教義を知りたくて来るのではなく、今のドロドロした生活をどうにかしたいから来るのです。その人の気持ちに応えるのも福音宣教だと思います。神様は私たちの目には見えないところで、きっちりとはたらいている。ああしろ、こうしろと説教するのではなく、当事者に寄り添って共に考え、間違った選択をしないように選択肢を提供する。本人がこうしたいと思った時には、何回も挫折しても、やりとげるものです」

事情はどうであれ、おめでと

「排除するのではなく共感する」…言葉では簡単に言えるが、いざ実行となると難しい。堤さんには、こんな体験がある。今から9年前、病院のソーシャルワーカーだったときのことだ。

「中学3年の娘が妊娠したんです。学校からご両親は呼び出されて、『居住地でない他府県で出産し、生まれた子は養子に出して復学すれば、卒業も認め、高校進学も許す』と宣告されてしまった。あわてたご両親が、親類のいる札幌で養子先を探すことになったんです。親子3人札幌に来たけれど役所でも、児童相談所でも断られ、私のいた病院を紹介されて、相談にきたんです」

妊娠8ヶ月という娘の美樹さん（仮名）に堤さんは言った。

「それは大変でしたね。びっくりしたでしょう。事情はどうであれ、おめでと。妊娠したということは、あなたが女性としてちゃんとした身体を持っているからで、元気な赤ちゃんが生まれるように一緒に頑張りましょうね」

美樹さんに、どうしたいのかを聞いたら「赤ちゃんは手放したくない」「中学は卒業したいんです」という返事が返ってきた。

堤さんはすぐに出身地の教育委員会に電話した。

「義務教育である中学校で、教育放棄が行われようとしています。間違っているのではないですか。適切な指導をお願いしたい」

そして児童自立支援センター（児童相談所）にも連絡をとり、美樹さんと赤ちゃんへのサポートを依頼した。

「美樹さんは無事、この病院で女の子を出産して出身県に戻りました。でも卒業までは赤ちゃんを自宅で育てず、地元の乳児院に預けるという学校側が出してきた条件をのまざるを得ませんでした。そんな学校に対するレジスタンスもあったのでしょね。卒業式当日、セーラー服姿のまま乳児院に赤ちゃんを迎えに行ったそうです」

今後の教会のあり方を示す

中学卒業後、美樹さんは自宅で両親の手を借りながら子育てに励む一方、通信制の高校を卒業した。中学の同級生だった父親も、親子3人の生活を始めるために定時制高校に通いながら懸命に働いた。

「成人式を迎えた彼は、美樹さんとの結婚を認めてもらうため訪ねたんですが、怒った父親が玄関から突き出してしまったそうです。でも何回か訪ねるうち彼の誠実さが認められ、2人は結婚したんです」

センターがオープンする1週間前、堤さんはその結婚式に招待された。切り捨てない堤さんの取り組みの姿勢が実を結んだのだった。

「神様を全面に出さず、生き方を分かち合っていく。私はこれも宣教だと思います。各教会に窓口を置いて、プライバシーを守りながらセンターとネットワークを結び、地域の人も教会の人も受け入れる。これを各教会がシステムとして組み入れるか否かが今後の課題です」

この堤さんの発想は、21世紀の教会のあり方を示唆していると言ってよい。第2、第3の堤さんの出現と、信徒の専門性、技能を生かす教会側の態勢づくりがまさに求められているのである。

「私は不自由な身体に生まれてよかった」

電動車イスで行商する渡辺浩一さん

どんな障がいがあっても、どんなに年をとっても、健常者と同じように生きる権利がある、というノーマライゼーションの発想が私たちに根づいていたら、もっと生きやすい社会になっているはずである。新潟清心女子高校では、宗教の時間に毎年一度、筋ジストロフィーの渡辺浩一さん（56）に自分の生い立ちを語ってもらっている。他人の手を借りなければ何もできない渡辺さんが、電動車イスに乗って生徒たちに「でも私は幸せだ」と語りかける。とかく他人の評価を気にしコンプレックスを持ったり、何となく毎日を過ごしている生徒たちに、「親からもらったいいエネルギーを出しながら、前へ進んで生きるのだよ」と訴える渡辺さん。生徒たちは生きる勇気をもらう。

食事、歯磨き、排尿も人の手を借りる

2004年6月22日。高校2年生の授業はこんな形で始まった。

「昨年もお邪魔した渡辺です。今日は8時にヘルパーさんがやってきて私を起こしてくれて、服を着せてくれて、家の前からリフトで電動車イスごと乗っけてくれる福祉タクシーに乗って来ました。私は交通事故にあったわけではなく、筋ジストロフィーという病気です」

まず渡辺さんは自分の病気を生徒たちに説明する。

筋ジストロフィーは運動神経が冒されて、筋肉の機能が奪われていく進行性の難病だ。渡辺さんは中学3年ころから歩けなくなった。

「転ぶと起き上がれなくなり、這(は)って移動してました。親は身体が動かなくなれば、もうお前は生きられないんだ、だからお金は残してやるから、黙ってハイハイと親の言うことを聞いて、親が年とったら施設に入ればいいんだ、という発想でしたね」

思春期に入っところから自分のことを意識し、悩むようになる。

「オシッコしたいと思っても、人の助けを受けないとできない状態になったとき、冗談じゃないと。本当の幸せは何なのか、人間の幸せとは、身体がいい人だけのものなのか。私のような人間は不幸せなのか、身体の不自由な面ばかり考えていると、不幸に向かって生きていくような気持ちになる。生活もつまらない。不自由で生まれてよかったという生き方は何だろうかと真剣に考えましたね」

親からもらったいいエネルギーを出して

ひとり暮らしの渡辺さんは、食事、排尿・排便、歯磨き、寝返りなどは毎日、福祉公社のヘルパーの手を借りる。夜は10時40分に寝かせてもらい、夜中の2時と4時20分の2回、体位交換をしてもらう。

トットツと心境を吐露する渡辺さんは、自分の身体を「壊れて部品交換ができない身体」という言い方をする。

「私が悩んでいたとき、『渡辺さんは赤ちゃんと同じだから、家を出て大人にならなければダメだ。障がい者と健常者が共同生活しているアパートがあるよ』と、勧めてくれた人がいたんです。そこは神父さんで、ベルギー人のアンリさんが倉庫を改造してつくってもらった共同住宅でした。そこに移ってから、壊れて動かない自分の身体を親以外にみてくれる人がいる、これなら生きられると思ったんですね。アンリさんは障がい者を一人の人間としてみる。もしアンリさんに出会わなかったら、いまの自分はなかったと思いますね」

1階は障がい者のために6畳3部屋、2階は健常者が住む6畳間が4部屋あり、食事は1階の6畳間に集まって食べるという共同住居だった。国際障害者年（1979年）が始まる2年前、渡辺さんが29歳の時のことだ。

「前向きに生きる人たちに触発されて、人のいっぱいいるなかに積極的に入っていこうと思ったんです。月に7、8万円の障害者年金をもらってましたが、社会で生きる人に近づきたいという思いから、品

物を電動車イスに積んで得意先を回って販売する行商を始めたんです。最初は知らない人に、『いかがですか』と声をかける。2、30人の人に声かけても売れない、そのうち雨が降ってきて品物がぬれたりして、本当に悲しくなりました。もう30人、もう100人に声をかけようと思っていたら、1人の方がバス券を買ってくれ、本当に涙があふれてきましたね。今はあちこちにお得意さんができて、しばらく行かないと『どうしたの』と心配してくれます。そういうとき、社会のなかで生きているなという感じがします」

自分では手足を動かせないから、品物の受け渡しは渡辺さんが買い手に「箱の中のものを取ってください」などと全部、指示していく。

こうして積極的に社会に出て、さまざまな人と触れ合うことで、身体の不自由さは、人間の幸せや生き甲斐に関係ないことを実感する。

「今、私は身体が不自由に生まれてきてよかったと思っています。不自由は身体のいい人にはない、体験できない部分で、自分の宝物、財産だと思っています。今は、人が困っている、心のなかで何か悩んだり、苦しんでいる人のアドバイスができれば、いいと思っています。死にたい、自殺したいと言った人が、私とかかわってそう言わなくなったとき、良かったと思います。学校に行きたくない、対人関係が苦手ですという高校生ともかかわったりして…。その高校生は今は学校へ行ったり行かなかったりしているんですけど、大事なことは親からもらったいいエネルギーを出しながら、前へ進んで生きる、困っている人が見える位置で生きていく人間になることだと思います」

この苦しみは無駄なことじゃない

アンリ神父は、授業で生徒に感想文を書かせプリントして、次の時間に生徒に配る。同じ話を聞いても、さまざまな受け止め方があることを学んでもらうためだ。プリントにはこんな感想が載っていた。

「実は私はアトピー性皮膚炎をもっていて、いま一番ひどいのですが、他人に分かってもらえない病気の苦しさというのは本当につらい

のです。今の苦しみは決して無駄なことじゃなく、何か意味のあることなんだとちょっとだけ考え方が変わりました」

「私はずっと『生きる』ということに無意味さを感じていました。生きていたって楽しいことなんてないし、苦しいことばかりで、『なんで自分は生まれてきたんだろう』という思いが生まれてきていました。『どうやって楽に死ぬるか』など、自殺のことばかり考えていました。しかし渡辺さんのお話を聞いて、手足の自由がきく自分は生きることに失望しているなんてばかなことだったと気づきました」

「私は今まで自分の容姿のことを、とてもコンプレックスに思っていて親に『もっとかわいく生んでほしかった』などと言ったりして、何回も困らせていました。でも本当に大切なのは、見た目ではなく心なんだとわかりました。心が美しくなって初めて、その心が容姿に出てくるんだと思います」

障がい者と共に生きる道を選択

アンリ神父は、ベルギーのルーベン大学での神学生時代、重度身体障がい者のキャンプでボランティア活動をしたことがきっかけで、ありのままの自分を受け入れることができたという。

「小、中学生時代は虚弱児で、勉強にもついていけず、『お前はペストだ』といじめられ、コンプレックスの固まりだったんです。中学1年の時、歴史の教師から『こんな成績ではダメだ。肉屋の息子が2年に進級できると思ってるのか』と屈辱的なことを言われ、悔し涙を流したこともあります。彼は神父でした。ところがキャンプでは、その自分が障がいを持った人たちから受け入れられたんです。彼らと共にいることで、中、高校時代の痛みを受け入れていない自分に気付かされました。そして自分にもできることがあると分かったんです」

それ以来、障がい者と共に生きる道を選択した。今も共同住宅で生活しながら、新潟大のフランス語の講師をし、厳冬期には夜宿の人たちと一緒に寝泊まりしている。

「人って、こんなに温かかったんですね…」

DV被害から立ち直りつつある母と息子

ここ数年、DV（ドメスティック・バイオレンス）＝配偶者からの家庭内暴力＝という言葉は、日常会話の中に定着している。だが被害者の約6割が「相談せずに一人で我慢する」という実態調査結果や、「密室の暴力」という性質上、DV被害者の実態を把握することは難しい。

K女子修道会が1996年に開設した緊急一時保護施設（シェルター）は、逃げ場を失った母親や女性を受け入れる“駆け込み宿”である。2003年度に扱った93件のうち約42%がDV被害者だという。どんな事情があっても排除せずに、ありのままを受け入れることに徹していることで救われる女性や子どもたちは数え切れない。

「彼は、本当はやさしい人なんです」

3年間にわたるDVの呪縛から立ち直りつつある韓国人2世、李美子さん（43）＝仮名＝も、その1人である。当時14歳と11歳、そして3歳の息子連れて韓国人の前夫と離婚したのは5年前だった。

やがて父親の店を手伝っているうち、飲みにくる馴染み客で、高校生ころから顔見知りだった男性（56）と再婚した。

「彼には全身に刺青がありますが、父も客商売をしているので特に偏見もありませんでした。彼も妻子と別れて同じ境遇ということもあって、お互いにもう一度やり直そうと…」

だが3人の子どもと生活を始めたたん、家は修羅場になった。しらふのときは無口でやさしいが、酒を飲むとガラリと人が変わった。

「わけが分からなくなってしまうんです。汚い言葉で一日中ののしって…。突然、手が飛んでくる。ケリが入る。私が動じないでいるものだから、今度は子どもにも八つ当たりしていくんです。子どもは『お

母ちゃんを殴るのやめてッ!』と泣きだす。私の身体はいつもアザだらけ。前歯は3本折れたし、右の耳は今でも難聴なんです。顔中血だらけで立ち上がれなくなったときは、娘が実家に電話して救急車で運ばれました。『訴えますか?』と聞かれたけれど、『夫婦げんかですから』って断りました」

というのも彼は暴力を振るった後、別人のように優しく変貌するDVの典型だった。

「酔いが覚めると、私の腫れ上がったアザだらけの顔をのぞき込んで、『またやったか、大丈夫か?』と心配そうに介抱してくれるんです。『いいよ、いいよ』って言うてしまう私もいけないんですね」

子どもたちは隣の部屋で、罵声や母親が殴られる音に身を固くしていた。精神的に追い詰められた長女は、ついに髪の毛を剃り込むという自傷行為におよんだ。5歳の息子だけを手元に残して、上の2人の娘は実父のもとに預けざるを得なかった。

暴力という見えない鎖にしばられて

「実は彼も自分を守るためには暴力の世界でしか生きてこれなかったかわいそうな人なんです」

彼は彼の母親が米軍基地の外国人相手の商売をしていた時の子どもで、父親を知らない。その母親も出産後、すぐに彼を祖父に預けて消えたという。外国人の顔立ちをした少年が他人のなかで生きていくには、当時の世間の目は冷たすぎた。

「言うことを聞かないと海岸から突き落とされたり、ひもじさに盗みをし、月謝をくれと言えば、『ウソをつけッ』と殴られたそうです」

人の愛情を知らずに育った彼は施設や鑑別所、少年院で、その天涯孤独な半生を過ごしてきたという。

そんな不幸な人生を背負った彼を救うのは私しかいないという思いが、理不尽な暴力にも耐える力となったのだろうか。

「私が殴られているときには息子は自分の部屋から絶対出てこない

んです。翌朝、そっと『母ちゃん、大丈夫?』って…。『もう家を出て行こうか。どうする?』と聞くと、『しょうがねえや、うちの父ちゃんだもの』という言葉が返ってくるんですよ。本当の父親でないことを知っている息子のその言葉がづらいんです」

そのころからだ。息子が学校に行ってしまうと、李さんはしらふでいるのが怖くて、夫より先に酒を飲まなくてはいられなくなった。

「酔ってしまえば、『朝鮮人は汚い』とか一方的にまくしたてる彼の言葉の暴力も耳に入らないから…。酔っぱらってカアッと寝ている彼の姿を見て、殺すのは簡単だと何度思ったかわかりません」

「酔っぱらって乱暴するおとうがイヤなんだよ」

ひんぱんに続く暴力に、実家に逃げては戻るという繰り返しだった。

『もう2度と暴力はしない』という約束で、去年(2003年)9月に入籍したんです。息子との養子縁組もしてくれました。これは最後のカケのつもりでした。でも何も変わりませんでした」

ある時、息子が夫の留守中に「いのちの電話」の名刺を李さんに見せた。学校でもらった「心のノート」と一緒に配られたものだという。

「母ちゃん、おれ、ここに電話する。毎日、毎日、酔っぱらって乱暴するおとうがイヤなんだよ」

李さんに何の迷いもなかった。ランドセルひとつで息子と家を飛び出したのは、入籍してから3ヶ月しかたっていなかった。

とにかく息子を児童相談所に預かってもらおうと、野宿を覚悟で市役所に駆け込んだ李さんは初めて2人はDV被害者だという説明を受け、シェルターの存在を聞かされた。

K女子修道会は、今から150年前のスペインで、無知と貧困のなかで売春をせざるを得なかった女性たちに、教育と技術を指導して社会復帰をさせる目的で設立された。第2バチカン公会議をきっかけに、「創立者の原点に返れ」という動きが起こり、社会から疎外された女性とともに歩む活動を展開している。

李さんを受け入れた施設長のシスターは、行政の不備を指摘する。

「公的機関からDV法による委託としての滞在期間は最長2週間。この間に早く住むところを決めるようにプッシュされ、お金も保証人もいない当人たちは結局、生活のメドが立ちにくく戻ってしまう人が多いのです。生活支援施設にいたるまでの3、4ヶ月の滞在日数の生活費は支給されますが、民間シェルターは法的に何の裏付けもありません。建物や人件費についてはほとんど支給されないため運営は非常に不安定です。4ヶ所ある施設はみな赤字。寄付をお願いするのは苦手ですが、そうしないと彼女らは救われないのです」

揺らぐ思いのなかで

李さんは自ら歩んできた人生と、施設での生活を振り返って語る。

「シスターや若い職員さんは、わがままを言う私を親切に受け入れてくれて…。苦しかったけれど、人がこんなに温かいということを実際に知った時期でもありました。昔、父が母をよく殴っていたの思い出します。でも子どものためにどこかで、この連鎖を断ち切らなければ…。もうふっ切れたし、ひとりで生きていけるから…」

だが養父から口ぎたなく否定された朝鮮民族としてのアイデンティティーや、DVを目の当たりにして過ごした3年間で幼い息子の心にどんな傷を残しているのか心配だという。

12月に離婚届けが受理された。が、親権を持つ彼は息子を引き渡せと家裁にまで訴えて執拗に迫った。結局、息子が15歳になったら本人の意思に任せることで決着したという。世間から排除されてきた彼の「おとう、おとう」と無条件になつてくれた息子に執着する思いが切ない。

李さん親子は2004年3月、ようやく児童福祉施設に落ちつくことができた。現在は生活保護を受けているが、体調が回復したら資格を取り、仕事について上の2人の子どもを引き取りたいと願っている。

患者・感染者への理解と連帯を

差別と偏見を取り去るために

日曜日の東京・新宿2丁目。ゲイの人たちが集まってくるバーやスナックが集中している街だ。その一角のビル3階でHIV感染者の手記の朗読会が開かれていた。飲み物を手に席に着いた参加者たちの年齢も性別もまちまち。病を得た人たちを友人や仲間として励ましてきた支援者たちが、彼らの手記を共感をこめて読み、短いコメントを述べていく。友人を失った悲しみ、親に打ち明けられない苦しみ、仕事場での差別と偏見、将来への不安、それらを乗り越え、前向きに生きたいという願い…。切々たる心情が、聞く人々の心に響いていく。

ガン闘病の体験が人を動かす

朗読者の1人、小柳ゆみ子さんは、都立病院でHIV感染者のためのKラウンジの世話人として、患者たちの話を聞き、要望を実現するために奮闘している。Kラウンジは、10年前に3人の感染者が「どうしても自分と同じ立場の仲間と話をしたい、情報交換もしたい、励まし合いたい、何かの役に立ちたい」と、担当医師に頼み開設された。

「当時は薬もなかったので、エイズは“死に至る病”と言われていて、3人の方も亡くられました。感染者の方はみなさん、すごく体調が悪くて、部屋を開けて用意して待つということも感染者だけでは無理なので、外部から信頼できる人を世話人として来てもらうことになったんです。私は4年前から2代目の世話人になりました」

小柳さんが世話人を引き受けたのは、12年前彼女自身がガンの告知を受けたことと無関係ではない。

「すごく元気できた自分がいきなり病気になってしまっただけです。それまではボランティアなんて無関係だったんです。でも手術や治療で元気

になったら、『今まで何も考えずに生きてきたけど、こんなことでよいのかな』と思えてきて。ちょうどエイズの問題が騒がれている時だったので、何か役に立てたらと『HIVと情報センター』を訪ねました」

5歳と1歳の子を持つ専業主婦で、何の特技もなかった小柳さんは、最初はニュースレターの発送やエイズ予防法のためのロビーイングを手伝っていた。そのうちに電話相談を受け持ち、さらに感染者がだれでも気軽に立ち寄れて、仲間に会える場所としてドロップイン・センターが始まったとき、そこの運営を任されるようになった。

「週2回、お昼をつくってお出ししてました。多いときは8人くらいいらしてましたね。初めて感染者の方にお会いしたときは、すごく緊張しましたが、あっという間に慣れました。子どもたちも小さかったので、都合がつかないときは、『連れていっていい?』と聞くと、こころよく『いいよ』と言ってくれて。ベビーシッターもしてくれて、ひとりの女の方は特に子どもをかわいがってくれました。子どももなついて、その方が亡くなった時は、本当に悲しんでいました」

病院の中でも知らされていない部屋

Kラウンジは、病院の中でも日当たりがよく、心地よい部屋が当てられている。あくまで病院の患者・感染者が主体的に運営するクローズドされた場所である。だからこの部屋の存在を知っているのは、感染症科の先生と数人の看護師、ソーシャルワーカーに限られている。感染者は担当医や看護師からKラウンジを紹介される仕組みだ。

「ラウンジでは自分の悩みや苦しみ、家族との葛藤、薬の副作用のことなど、皆苦しめますから、自然にそういう話になります。職場にどう言えばいいのか親にどう話したらいいのか、経験者が語ってくれる場なんです。やはり人間関係の悩みが深いですね。親が嘆くだろうと、親にだけは言いたくないという人もいます」

入院すると親に知られるからと、最後まで入院せず昏睡状態になって病院から家に連絡したケースもある。

「ご両親が見えたときは、もう意識はなく『なぜ、もっと早く』と嘆かれるのを見て、すごくつらい気持ちでした。私たちは当事者の生き方をサポートする立場ですが、ご家族の気持ちを思うとつらいことがあります」

孤立に追い打ちをかける偏見、差別の目

最近ではKラウンジで互いに励まし合っているだけでなく、社会に出て、この病気に対する偏見、差別観をなくしたい、経験者として予防を訴えたいという希望が、感染者から出てきた。それに必要な資金を集め、企画を実現させるのも小柳さんの仕事になってきた。

トヨタ財団やリーバイストラウスから助成金を出してもらい、2002年には長野で、2ヶ月に1回、『経験を話し合う会』を開催した。

「たまたま私の前任者だった木村久美子さんが転居先の軽井沢近くでエイズ支援活動を続けていたので、話はとんとん拍子に進んで…。東京から感染者が7、8人、長野では地元の養護教師、東京の大学生などいろいろな人が毎回10人ほど参加、互いに丸く輪になって話し合いました。大好評で2年続けました」

次の年には東京・文京区で小学校のお母さんたちを対象に開いた。20人近くの母親が感染者7、8人と同じテーブルを囲んだ。

「みんなズバズバと聞いていましたよ。エイズのことだけでなく、ゲイの方も来ていたので、セクシャリティも話題になりました」

最近では、感染しても定期的な通院や服薬で、病状をコントロールできるし、また届け出れば障害者手帳が取れるようになった。しかし地方では、感染者がいるというだけで結婚や就職にも差し障りが出てくるため、都会に出て孤独な闘病生活を強いられる人が多い。

「まだまだ偏見が強いですから地元の病院に行かない人も多いですよ。上司が理解してくれて通院、服薬しながら仕事を続けている方もいますが、感染を知らせたことで差別を受け、仕事を辞めざるをえない状況に追い込まれた人もいます。矛盾しているようですが、感染し

た方が病気を隠さず暮らせる世の中にならないと、感染者の数は減らないと思います。特殊な人たちの病気だという情報が先行して流れていますよね。それが差別と偏見を助長しているんです」

愛の教えを説くキリスト教の世界でも、倫理的視点に重きを置きすぎると、差別と偏見から孤立させられているエイズ患者・HIV感染者を無視し、白い目を投げかけかねない状況にある。

「感染者があたりまえに生活している、病気にもきちんと対応している方が多いということを知ってほしいです。予防さえしていれば、HIVの感染率は、肝炎ウイルスにくらべ低いのです」

新薬が開発され、発症が抑えられるようになった。だがHIVが難病であることに変わりはない。1日3回、薬をきちんと服用しないと95パーセント以上の確率で耐性ウイルスができる危険がある。副作用もある。しかし、それ以上に感染者を悩ませ、苦しめるのは世間の目である。社会の無理解と偏見が人間関係をゆがめ、病を得た人を二重の苦しみに追い込んでいく。

だれでも病気になるチャンスはある

最近、ごく普通の女子大生が「私、感染しちゃったんです。私ぐらいの年の人、ここに来ます？」と、Kラウンジを訪ねてきた。

「今のように男女交際が自由だと、エイズ予防の知識がなければリスクは本当に高くなります。若い人たちの間で、感染が隠れて広がっている事実をもっと知ってほしいと思います。母親たちも『家には関係ないわ』と思わず、子どもと真剣に話し合ってもらいたいんです」

ハンセン病に対する差別と偏見に半生をかけて闘ってきたハンセン病の元患者でキリスト者、森元美代治さんは、エイズコミュニティー雑誌『にじ』に、一文を寄稿、HIV感染者を励ましている。

「どんな病気になっても、それを人に隠すことはないのです。だれもが病気になるチャンスはあります。同時にどんな病気になっても、人間として立派に生きる可能性があります」

荒れ野の旅に光が見えた

統合失調症28年の歩み

さまざまなマイノリティだけでなく、統合失調症を抱える人たちにも、私たちは冷たい排除の視線を投げかけてこなかっただろうか。

ここに登場するKさん（57）は、幼児期に受洗したが、「掟としての信仰」を強く身につけたため、病が発症したときは、性の問題に苦しみ、神の掟に反した自分の生活が病の原因なのだという罪悪感に捕えられていた。そのうえ病により社会参加できない孤立感、世間の蔑視、偏見による排除から生じる孤独と、いくつも重なった苦悩のどん底に落ち込み、歩み続けてきた。

その彼が病を受け入れ、心穏やかに生活できるようになったのは、入院中の病院で、彼のありのままを受け入れてくれた同じ病を持つ若者たちとの出会いがあったからだ。

完治はしていないがインタビューに応じて淡々と語る彼からは明るさと希望さを感じられる。それは彼が信仰や自分の体験を人に語り、相談者の話に耳を傾ける現在の生活が、心のケアになっていること。また今の教会が、心に深い傷や病を持つ人々とともに歩もうと努力していることで、同じ病に苦しむ仲間と語り、支え合うことができるようになったことも、大きく起因していると思われる。

性に対する強いこだわりで苦しむ

彼が発症したのは工業高校の英語教師を始めて3年目、30歳の時だった。ツッパリ生徒がのさばり、必要以上のエネルギーを消費した。進学をあきらめている生徒たちの英語への関心は薄く、教師生活にむなしさを感じていた。ストレスがたまっていく。

「同僚からの誘いによってストレスを解消するため、足しげくソー

ブランドに通い、私は完全に色情家になって、風俗嬢の虜（とりこ）になってしまったのです」

日曜日のミサやゆるしの秘蹟は受け、信者としての勤めはきちんと果していた。だがソーブランド通いは止められない。罪悪感から性器が異常に気になり、性病にかかったのではないかと独り悩み、苦しむ。

「それはものすごい罪悪感でした。モーゼが山の上で怒りに任せて十戒が書かれた石をバーンと割ったときのイメージと重なります。神様から罰せられたという思いです」

通院もしたが、ますます性に対する執着は強くなり、古本屋を歩き回り、ビニール本で部屋中が埋まっていく。

「幸いなことに検査結果はマイナスでした。しかし信仰者でありながら、何て恥ずべきことをしているのだらうという、生活と信仰の落差の大きさに心の葛藤は続くんです」

暗闇だけが私の仲間

間もなく教師を辞めた。人間不信、医師不信に陥り、仕事も医師も次々に変えた。持続性がない、疲れやすいというのが病気の特徴。いつでも気ままに辞めることができる「きつい、汚い、危険」といわれた3Kの仕事を10年、渡り歩くことになる。

「自分から選んだ仕事なのに、被害妄想で仲間を怒らせたり、体力が続かなかったりして辞めてしまい、一時は守っていた禁欲生活も崩れて、またソーブランドに通う生活に後戻りしてしまうんです。当時はバブル期の真っ最中で経済的にはうるおっていましたよ。でも能力的に追いついていけなくなり、社会から取り残されていく。精神病ということで差別や蔑視、偏見から、社会より排除されていることを感じ、孤独感で私の生活はまさにどん底でした」

ここまで語ると、突然、彼は「この詩は統合失調症を患う者の叫びです。当時の私も暗闇だけが仲間でした」と言い、『教会の祈り』を

大きな声でとなえ始める。

「神よ、どうして私を捨て、なぜ顔を隠されるのか。苦しみ続けた私は死にひんし、あなたへの恐れに怯えている。あなたの怒りが私を襲い、憤りが私を滅ぼす。あなたは私から愛する友を引き離される。暗闇だけがわたしの仲間…」(詩篇88)

心のウミが抜け、さわやかに

3 Kの仕事辞めて3年後。幻聴を聞き、初めて入院する。6ヶ月後に退院、作業所に通うが再び入院を余儀なくされる。

「食べて寝るだけで何もできない日々が2年も続き、とうとうある日、靴下もはく気力がないほどの脱力感に襲われたのです。閉鎖病棟に1ヶ月半入院したのですが、でもこの脱力感は病気の変化ではなく、薬の副作用からきた体の硬直だと主治医に言われました」

だがこの入院が、実は現在の「寛解」(かんかい)状態を生むきっかけになっていく。一緒に入院している若者たちから「先生、先生」と慕われる。英語を教え、相談にのり、会話を楽しみながら若者のエネルギーを吸収していく。やがて性に対する罪悪感で遮断していた青春時代を彼は取り戻していくのだ。

「障がいを持った人同士のカウンセリングになっていたのですね」という問い掛けに、彼はにっこり笑って、こう答える。

「あれは不思議な1ヶ月半でした。別に性的な悩みはなく、秘蹟も受けていないのに心のウミが出て、非常にさわやかになったのです。もちろんそれからいろいろありましたよ。そんなに簡単に生きてはいけないのです。でも性のこだわりが抜け、解放されたのです。そして今の私のこだわりは、聖書、神へのこだわりです」

退院後、彼は作業所に通いながら自分の体験を発表したり、ボランティア活動をしたり、聖母マリアへの祈りも始める。その一方では精神障がい者の自助グループの設立にも加わり、同じ病に苦しむ男性の相談相手にもなっていく。障がいを持った者同士が互いに話し合うこ

とで、生きる力を得ていく。やがて自分にしか向いていなかった心の目が外に向かって開かれていくのである。

「私にとって大自然や音楽は回復の助けにはなっていません。祈りだけが私の助けです。私の脇にすぐに助けの手を伸べてくださる、そして、じっくり話を聞いてくださるマリア様の存在があることが、大きな回復の助けになっているのです」

荒れ野の40年を乗り越える

「あなたの病は神の摂理でしょう」という主治医の一言で、彼は大きく心を変えることができた、という。

「病に苦しんでいるときも、神を信じていたし、神に支えられているという感覚はありました。でも子どもの時から教え込まれた掟を破ると裁くという“怖い神”の理解から、私の弱さを分かり、過ちを優しく包んでくれる神へと変わりました。今まで持ち続けてきた信仰からくる罪悪感や病からくる苦しみから私は解放されたのです」

裁く神からありのままを受け入れてくれる神への認識を深めることで、他人を思いやる心がはぐくまれているように見える。

「統合失調症の人の人生は『荒れ野の40年』です。私は今、荒れ野の旅路のさまざまな過ちを乗り越えて、幸せです。社会のなかではリストラや厳しい労働条件の下で苦しんでいる人が大勢います。でも私は障害者年金や給料で、隠居のような生活をさせていただいています。私は病と共に確実に一つの道を歩んでいます。苦しいことも、つらいこともありました。でもそれを乗り越えて楽に生きることができるようになったのです。それがとても大切なことなのです」

こう語ると、彼は再び『教会の祈り』をととなえ始めるのだった。

今から4年前、53歳の8月。彼は医師から「寛解」という言葉をもらっている。「寛解」とは、病気の完治ではない、薬を飲み、病気と付き合いながら、社会生活ができる状態を指す。だが、かならずしも就労ができるわけではない。

事前に当協議会事務局に連絡
することを条件に、通常の印
刷物を読めない、視覚障がい
者その他の人のために、録音
又は拡大による複製を許諾す
る。ただし、営利を目的とす
るものは除く。なお点字によ
る複製は著作権法第37条第1
項によりいっさい自由である。

「四旬節キャンペーン課題解説」No.19 2005年

「ひびき 2005」

2005年2月9日 発行

編集 日本カトリック司教協議会
カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411
カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社



Caritas
Japan

カトリック教会

カリタス ジャパン